

困難であるかと言ふと、一體何が善で、何が悪であるかと言ふ事を判断する事が六ヶ敷いのである。子供等の兄弟喧嘩にしても、どちらが悪くて、どちらが善いのであるか、決して速断する事は出来ない。そこには何か原因があり、双方に言ひ分があるのである。故に外部に現はれた行爲のみをもつて、善悪の判断をすると、飛んだ不公平が生じ、叱られた方は親を怨み、こんどは両親の見て居ない所で喧嘩をするやうになる。自分は時々裁判を傍聴に行く。誰が見ても悪いと思はれるやうな事件でも、裁判長は中々取り調べに慎重を極めて居る。證人を呼んだり、證據を集めたり、一事件を公判に附するまでには並々ならぬ苦心である。それでさへ不公平があると言ふので、辯護人制度を設け、陪審制を採用し、更に三審制となつて居る。然しこれでもまだ決して完全とは言はれない。かくうはべの行爲の善悪を判断するのでさへ、容易でないのであるから、更にその動機に立ち入つて、是非をきめる事は不可能だと言つても差支はない。殊に四五十の父や母が、十六七歳の娘や、五六歳の息子の問題を、彼等の立場に立つて判断する場合には、その困難が一層甚だしいことになる。両親や教師の方では分つた積りで居つても、子女の立場から見ると、父母や教師は自分達を理解してくれないと言ふ事になり、そこに不平不満が生ずるのである。

生理的惡事

兒童はなぜ悪い事をするのであるか、その原因を知つて置く事は、兒童に刑罰

を與へ、躰をする場合において、必要な事である。

子供が所謂悪い事をしたり、規律を守らなかつたりする第一の原因は、生理的缺陷に基く場合である。例へば胃腸が悪かつたり、厚着をし過ぎて頭痛がする様な時や、アデノイドや齒痛の場合などには、どことなしに気分が勝れず、感情がいら立ち、父母の言ひ付けや、教師の命令が守れないものである。殊に精神の統一を缺き倦怠を覚え、家庭においても、學校においても何事につけ、だらしがなくなる。かゝる場合において彼等に刑罰を與へたとすると、彼等がそれに對してどう言ふ態度をとるかと言ふ事は想像に難くない。それよりも寧ろ彼等の生理状態を調査し、これを治療し、その健康を恢復してやる事が急務である。

無智に由る惡事

第二に子供の惡戯は彼等の無智に基因して起る場合が少くない。即ち悪いとは知らずに悪い事をするのである。著者の知つて居る四つの女の子が、或る日自分の着て居た着物を脱いで、水につけて酷く叱られた。よく調べるとその子供はその前の日に、母親がその女の子の着て居た衣服をわざ／＼脱がせて、洗濯するのを見て居つた相である。つまり子供は母の眞似をして、母のお手傳をするつもりであつたかも知れないのである。何れにしても惡意などは毛頭なく、無智のための行爲であると見る事が出来る。これに類似した惡戯は決し

て少くない。かゝる場合に刑罰を與へ、着物を汚したと云つて叩いたとすれば、子供は何んのために叱られるのか譯が分らず、驚きと、悲みと、怖れと、怒りが、彼等の小さい胸に満ち、それがやがて成人の後に反抗心となり、復讐となつて現はれてくるのである。かゝる場合において刑罰を與へる事は甚だ不自然である、それよりも寧ろかくする事がなぜ悪いのであるかと言ふ事を、やさしく教へてやるのがよい。

不注意に由る惡事

第三の場合は不注意から生ずる惡事である。この種の惡事は日常最も頻繁に起るものである。お茶碗を壊したり、硝子を割つたり、お金をなくしたり、着物を破つたり、お父さんの大事な盆栽を覆したり、怪我をしたり、數へあげれば限りもなくある。不注意の結果失策をした場合は、第一や第二の場合よりもやゝ罪が重い、矢張り惡意があつてやつた譯でないのだから、たゞ單に叱ると言ふだけでは不適當である。それには彼等の不注意であつた點を指摘し、親切にどこまでも指導してやるのがよい。

代表的惡事

第四は代表的惡事と云つて、自分自身のためでなく、自分のお友達や、自分の屬する團體のために、義侠的に悪い事をする場合である。この惡事は十二三から十五六歳前後の子供に多い惡事であつて、さう澤山ある譯ではないが、それでもどうかすると少

年少女や青年達も犯す罪である。誰しもこの時代は感傷的となり、英雄崇拜時代であつて、自分自身も小英雄氣取りで、お友達の身替りとなつて、悪いと知り乍ら罪を犯し、危険だと知り乍ら敢て冒險をするのである。勿論この場合に彼等は叱られる事は覺悟の前である、寧ろ罰せられる事を痛快に思ふ事さへある。斯様な場合には叱る方でも餘程手心を要する。表面に現れた行爲は悪いに違ひないが、その動機においては屢々立派なものがあるからである。父母教師たるものは彼等の犯した惡事は飽くまで矯正してやらなくてはならないが、その心事は諒としてやらなければならぬ。

理論的惡事

第五の場合は理論的惡事と云つて、理論の相違から生ずる惡事である。即ち自分では惡事ではないと思ふことが、親や教師の立場から見ると、見解の相違から、それが惡事となる場合である。この種の惡事は青年期に最も多く見られる。近來頻々として起る青年の思想問題などはこの一例であつて、その取扱ひが可なり六ヶ敷いのである。親と子の教育の程度が異り、時代が違ふためにこれが解決は決して容易ではない。然し何れにしても單に刑罰や腕力をもつて、制裁を加へ可き性質のものではない。親も子もお互に充分研究の餘地がある譯である。思想は思想で解決せよと言はれて居るが、この場合特にその必要を痛切に感ずる。

有意的惡事

第六の場合は有意的惡事と言つて、悪いと知り乍ら悪い事をする場合である。

朝寝坊をしてはならないと知り乍ら朝寝坊をしたり、學校道具や衣服を整理して置かねば叱られると知り乍ら、散らかして置いたり、嘘言を言つてはならない事は百も承知をしてゐ乍ら、時々嘘言をつき、親や兄弟を困らせる。この種の悪事は一番罪が重いから、多少刑罰は免れない。然し考へて見れば、子女が有意的悪事をするやうになるにも、相當の理由があるのである。例へば幼少の頃知らずしてやつた悪事に對して嚴罰を受けた怨みとか、父母の悪い手本とか、その他精神的物質的境遇の結果に外ならない。かく煎じ詰めて見れば子女の悪事はみんな兩親の責任であるから、子女に反省を促がすと共に、兩親も深く反省すべきである。

身を以つて指導に當れ

京都の同志社大學が創立されて間もない明治三十四年の頃、或る事件で生徒の同盟休校問題が起つたことがある。然しそれも大體解決の曙光が見えて來たので、或日、學長の新島襄先生始め教師と生徒とが一堂に會して、その解決案を議して居つた。すると會議の最中に突然新島先生は、生徒の悪いのは學長が悪いからだと言ふ烈しい自責の念から、傍らにあつた杖を以つて自身の掌を力任せに打ち叩き、遂に鮮血は流れ、杖は折れて仕舞つた。これを見て居つた他の教師や、生徒達は新島先生の徳に感激し、無言の中に互讓の精神をもつて萬事を圓滿に解決したと言ふことである。また申すも畏れ多い事ではあるが、

明治天皇陛下は御製に、

罪あらば我れを咎めよ天つ神

民は我が身の生める子なれば

と仰せられて居る。我々が子女を指導して行くにも、この眞剣な態度が必要である。口先だけでは子女の指導は出來ない。御製に現はれて居る様に、國民の父としての陛下の貴き思召や、また新島先生のような強い責任感や反省の精神がなければ、決して子女を指導する事は出來るものではない。

消極的命令を避けよ

子供の躰をする場合に、消極的になり過ぎて、あゝしてはいけない、かうしてはいけないと言ふ風に、打消的否定的命令をする事は、餘り望ましい事ではない。それが屢々その反對の暗示を與へて、却つて豫期しない結果を齎らすのである。西洋の童話の一節に、次のやうな事が書いてあつたのを讀んだ事がある。「昔ベルシヤの王様が隣の國と戦争をするために、澤山の軍用金が要るので、種々と思案して居ると、何處からともなく一人の魔法使が現はれ、王様に風呂敷に包んだ茶碗を與へて、お金が欲しい時には何時でも、神々に金を與へて下さいと念すれば、金貨がいくらでもこの茶碗から出て來ると傳授した。たゞ一つ大切な事は、王様が神々を念する時に決して河馬(動物)を思ひ出してはならないと言つて立ち去

つた。王様は大變喜んで教へられた通りに神々を念じ、河馬の事を思ふまいとしても、どうしても河馬が氣になり、思ふまいとすればするほど、思ひ出してとうとう「駄目だつた」と言ふのである。馬鹿げた話のやうだが、その内に深い眞理が含まれて居る。即ち否定的命令は却つてその反對の暗示を受け、してはならないと云はれた事がしたくなるのである。エデンの園におけるアダムとエバの物語も同じ心理である。神は彼等に總ての木の実を與へたが、たゞ一つの実を食べると命じたのであつたが、彼等は却つてその禁斷の木の實が欲しくて仕方がなかつた、遂に誘惑されて神から堅く禁ぜられた、たゞ一つの命令をも破つて罪を犯すにいたつたのである。

積極的の命令を與へよ

子供を躾ける場合において、何々をするなど言ふやうな消極的の規律や命令を避け、積極的に何々をなせと言ふ方が遙かに教育的である。

また一寸した機轉一つで、消極的な命令を積極的の命令に替へる事も出来るのである。例へば「己れの欲せざる處を人に施す勿れ」と云ふ替りに、「總て人にせらんと思ふ事を人にも施せ」と云ふ風に直せばよい譯である。また成る可く命令的語氣を避け、出来るだけ獎勵的態度を示し、恐怖の感情に觸れることなく、寧ろ兒童の興味や好奇心に訴へ、缺點を指摘する替りに、その長所を見てやるやうにすれば、子供等は自信を得、喜んで規律を守るやうになるのである。殊に兒童の自尊心を傷

けたり、劣等感を與へるやうな、嘲笑的侮蔑的な小言を言ふ事は絶対に慎んでいただきたい。

小言より仕事

自分の家庭教育における標語の一つは「小言より仕事」と言ふのである。兒童に何んの仕事も與へずに、たゞ單に抽象的な命令を發することは残酷であり、非教育的である。「小人閑居して不善をなす」と言ふ諺があるが、小人たらずとも暇のある事は決してよい事ではない。近來文明の進歩につれ、機械や交通機關が發達したため、人間の仕事が減つて次第に暇が多くなつて來た。家庭においても電氣や瓦斯や水道などの使用によつて勞力が省けるやうになつた。然も將來はこの傾向が一層増長する事であらう。而してこの暇をどう言ふ風にご利用して行つたらよいかと言ふ事は、今後の大なる家庭の問題であり、また社會問題である。家庭教育の秘訣は、仕事を子供達に適當に分配してやる事である。具體的な仕事を與へずして躾をする事は絶対に出来ない。私は口癖のやうに、二人前の仕事を一人でする働き者のお母さんであるより、二人前の仕事を四人なり五人なりの家族に公平に分配する事の出来る、お母さんであつてほしいと言ふのである。有閑婦人である事もよくないが、忙し過ぎて修養する暇のないのも褒めた事ではない。然し仕事を子供達に適當に分配する事は決して容易な事ではない。簡単な仕事から始めて段々六ヶ敷い仕事を與へ、仕事を通して躾をするのである。例へば長女にはお客の取次ぎを命じ、長男

にはお風呂の水汲みを命ずると云ふ風に、年齢に應じ性別によつて、不公平のないやうにしてやらなければならぬ。朝寝坊で困る總領に、毎朝妹を起して着物の世話をするやうな責任をもたせる事は、彼の朝寝坊を矯正する方法として、叱るよりも遙かに効果的である。また不作法で困る娘の躰はお客様のお取次ぎや、茶菓の給仕などをさせる事によつて改善する事が出来るのである。

勞働の分擔と家庭の幸福

私は世界大戰當時紐育市の郊外に住んで居つた社會學者として有名なウワード教授から、クリスマスの晩餐に招かれた事があつた。その時の楽しかつた記憶は今でも忘れる事が出来ない。殊に印象の深かつた事は博士夫妻の家庭教育であつた。博士の家庭には子供が三人あつた。家庭の空氣は如何にもデモクラチックで、お客の取次ぎから食卓の給仕まで、家庭の仕事は全部よい具合に家族の間に分擔されてあつた。博士は一々、クリスマス・ツリーの裝飾は誰がやつたのだとか、食卓に運ばれた鶏は誰が世話をしたのだとか、私達に説明してくれた。博士の家庭には女中は居らなかつた、それでも總てが整頓し、夫人は毎朝十時頃から大學に行つて博士の講義を聽いて、午後三時頃に歸宅し、夜分になるとその日の博士の講義を批評するのが日課であると言ふ事である。子供達に何んの仕事もさせずに遊ばせて置いて、やれ兄弟喧嘩をしたと言つて叱り、やれいたづらをしたと言つて怒鳴つて居るお母さんや、

縦のものを横にもしないで、家族を額でつかつて居るお父さんは、この點について反省を要するのではあるまいか。家庭教育の立場から見ても、家庭の幸福を増進するためにも、父も母も男の子も女の子も、家事萬般の仕事を公平に分擔しなくてはならない。植木に水をくれる事でもよい、小鳥の世話でもよい、仕事がなければ工夫してでも仕事を作るのである。夫や子供が家庭に興味を失ひ、家庭を外にして遊び歩くやうになるのは、家庭に居つても仕事がないからである。上流の家庭における教育の缺陷は多くはこゝにあるのである。家庭の躰は勿論、家庭を愛する精神も、家庭における眞の幸福も、この家庭勞働の公平なる分擔から始まる。

子供の叱り方

刑罰はなるべく避ける方がよいが、然かも時にはどうしても叱らなければならぬ事がある。然しかゝる場合においても出来るだけ、口先きの小言を避けて、悪事の結果を身に體驗させるやうに指導する方が遙かに有効である。例へば五六歳の子供が母の命令に反して、泥こねをして着物を汚して歸つて來た場合に、子供を叱るよりも、先づ子供の着物を脱がせ、靜かに子供をベッドに入れて「お母さんがお洗濯をしますから、乾くまでおねねしてゐなさい」と言ひ聞かせるのである。すると子供は始めて自分がお母さんの命令に服従しなかつたために、母に餘分の手数をかけ、自分もまた遊ぶ事が出来ないで、不快な思ひをしなければなら

ないと言ふ事を體驗し、初めて自分のした事が悪かつたのだと悟るのである。

病氣と躰け

子供が二三ヶ月以上に亘る長い病氣をした場合は、その間規律を怠るため、全快後に色々の面倒が起るものである。病氣の最中はどこでも同じ事であるが、子供に全力を集中し、子供の言ふ事は何でも満足させ、彼を小さな暴君にして仕舞ふのである。その結果病氣全快後規律を重んじなくなり、非常に我儘になる事が少なくない。この種の子供の取扱ひは可なり困難である。彼等は屢々我儘をしたいために、同じ病氣を繰返さんとする無意識的願望に驅られ、ひどく叱られたりすると、著しく食慾が減じたり、熱を出して病的症狀を呈する事がある。體の弱い子供は概して我儘なものであるが、「我儘だから體が弱いのだ」と言ふ事も言へるのである。かゝる兒童に對しては、無關心的態度をとるのがよい。即ち我儘を言つても別に罰せず、またさうかと言つて彼等の我儘をも認めず、無視して放任して置けば自然に直るものである。

躰けの六則

この外子供の躰けについて書けば、際限もなく長くなる。故に躰けに關する五六の項目だけを次に擧げてこの項を終る事とする。

- 第一、刑罰を與へる時には、憎惡の感情を交へるな。また恐怖心や復讐心に訴へるな。
- 第二、子供を叱る場合には成可く現在の事に限定し、過去の事や將來の事をくたくしく言ふな。

第三、規律や刑罰には矛盾があつてはならない。昨日許した事を今日罰し、今日罰した事を明日許したりしてはならない。

第四、叱るより褒めよ、命令するより模範を示せ。

第五、躰は生理的・心理的狀態に順應して與へよ。殊に協同心、社交心を教養せよ。

第六、躰は高尚なる生活の目標と動機に訴へよ。

第三十八章 環境としての住宅

住宅は家庭教育の教室であり、また一家團樂のパラダイスである。兒童は生れ落ちるから、小學校に入學するまでの、六ヶ年間をこゝに過し、最も密接な交渉を有してゐる。従つて住宅は物質的にも、また精神的にも、重要な環境である。

住宅は教室

既に述べたやうに父と母とが集まつて、家庭を作るやうになつた最大の目的は、子女の家庭教育にあるのである。然るに今日の家庭を見ると、屢々この眞意義を没却し、子供本位を捨てて、大人本位となり、更に老人本位となつて來た觀がある。住宅建築の様式を見ても、子女の生活や教育と

云ふ事よりも、父や母や、祖父母の趣味や都合が考慮され、住宅は一種の骨董物となり、どここの部屋に行つて見ても、子供の觸れてならないものが、一杯陳列してあつて、朝から晩まで、父や母の小言の種は、子供が座敷を散らかしたとか、大事な花瓶を弄つたとか、お父さんの碁打ちの邪魔をするとか言つたやうなことばかりである。極端な言葉かも知れないが、この種の住宅は、樂園であるよりも、寧ろ兒童を監禁して置く、一種の牢獄のやうなものである。申すまでもなく、幼兒は好奇心に富み、見るもの聞くもの、總てに觸れずしてはやまない存在である。また彼等の智能は實際これによつて啓發されるのである。故に家庭を教育の場所とし、子供本位に環元するには、先づ從來の住宅の構造を改造し、少くとも家庭内に一室位は、子供の自由になる子供部屋を作ることが必要である。

小供部屋

小供部屋は家庭において、最も重要な室でなくてはならない。而して子供部屋の位置を決定するには、先づ第一に採光を考慮に入れる事が肝腎である。太陽の光線は、骨髓や歯牙の健全なる發達のために、必要缺く可からざる要素である。榮養學の研究に據ると、日光はヴァイタミンDと同様の働きを有し、食物中にある養分を、骨分に變化させる作用を有して居る。日光浴が不充分の場合には、どんなに榮養物を挿取しても、身體の健康を保つことは恐らく不可能である。日蔭に育つ草木を見ても分るやうに、太陽の光線は吾人の健康維持の絶対條件である。佝僂や脊髄に關する諸病は、日光の不足が直接原因となつて起る病氣だと考へられて居る。故に子供の部屋は、最も多く日光を受けるやうな場所に設けられなくてはならない。

居室の通風

子供部屋に限らず、總ての居室は通風が大切であるが、殊に小供部屋は適度の換氣を要し、常に空氣を清淨にして置かなければならない。普通戶外の空氣は七十九パーセントの窒素と、二十パーセント強の酸素と、〇・〇四パーセントの炭酸瓦斯とから成り立つて居る。ところがこの空氣が一旦呼吸によつて肺に入り、酸素が吸収され、炭酸瓦斯が排泄されて呼出されると、その成分が變つて、窒素七十九パーセントと、酸素十六パーセント強と、炭酸瓦斯が四・三八パーセントとなるのである。普通成人が一晝夜間に呼吸する空氣の總量は、一萬リットルと云ふ莫大な容積であつて、これを一時間に計算すると四百リットルとなる。即ち四時間に一人當り一坪餘りの空氣が必要とされる。假りに八疊の日本間(體積約六坪)に、六人の人が居るとすると、四時間の間に、全部の空氣が一回呼吸される計算となるのである。また三間と四間の教室(體積約十八坪)に五十人の生徒を收容して居る場合には約一時間半の間に全體の空氣が濁り、四疊半の寢室に一人寝ると、三時間半ほどの間に、部屋全體が濁つて、前記のやうに炭酸瓦斯が〇・〇

四から、四・三八パーセントとなり、この場合炭酸瓦斯の増加率は實に百倍強となる譯である。炭酸瓦斯が有毒な事は申すまでもない。専門家の研究によると、炭酸瓦斯の含有量が一パーセント以上になると身體に危害を及ぼす。即ち二パーセントに達すると、多少の呼吸困難を感じ、軽度の眩暈や耳鳴を起し、三パーセントとなると苦痛が増加し、七パーセントとなると短時間の間に人を致死せしめ、三十パーセントに至れば、直ちに人を斃死させると言ふ事である。勿論大氣中にある有毒瓦斯は炭酸瓦斯だけではない、その外にも少量の亞硫酸、亞硝酸、一酸化炭素などがある。然しこれ等の有毒瓦斯の發散は、炭酸瓦斯のやうに呼吸のために生ずるものではない。故に全く密閉された室内に長く居る事が、身體に害ある事は言を俟たない。故に居室殊に發育盛りの子供等の部屋の、通風換氣には特別の注意が拂はなくてはならない。

居室の温度と湿度

次に小供部屋の温度及び湿度について考へて見よう。從來室内に居つて頭痛や眩暈などが起るのは、炭酸瓦斯の影響だとのみ考へられて居つたが、最近の研究によると、炭酸瓦斯の外に、室内の温度及び湿度が、これと重要な關係をもつて居ると云ふ事が分つた。元來人間の體は體温をいつも一定の高さに、保持しようとする機能をもつて居る一種の熔鑪爐のやうのものであつて、食物と云ふ石炭から攝取する、カロリーの燃焼によつ

て體温を生じ、然かもこの體温は高からず低からず、常に攝氏三十七度(華氏八十八度)内外の温度を保つやうになつて居るのである。而して體温が攝氏三十七度以上に昇るやうな場合には、自然の調節によつて、皮膚面から過剰の熱量を發散して、常に平均温度を保つために、自動的に調整をするのである。處がこの體温の自動調節作用は、空氣の温度と、湿度とによつて、種々の影響を受けることになる。大體において外氣が華氏の六十五度内外のときが、體温調節のために理想的だと考へられて居る。若しそれ以上の氣温になると、その程度によつて體温の發散が困難となり、その結果不快を感じ、甚だしくなると頭痛を起すやうになる。一方、室内の湿度もまた氣温と同じく、體温の發散と深い關係を有して居る。理想的湿度は氣温とほぼ同じく、六十度内外だと考へられて居る。故に湿度計が七十度とか七十五度とかに上昇する場合には、體温の皮膚面から放散する事が困難となり、そのために體が重苦しくなり、更に甚だしくなると頭痛眩暈の原因ともなるのである。大氣中に濕氣が多くてむし暑い梅雨期などに、何んとはなしに不快を感じるのは、これがためである。故に室内が餘り乾燥し過ぎるのもよくないが、同時に湿度の高過ぎるのもよい事ではない。多數が集合する場合には、單に炭酸瓦斯が発生するばかりでなく、自然と濕氣も高まり、呼吸中に含有する水蒸氣のために湿度も上昇し、その結果として前記の様に、頭痛や眩暈が起るのである。

故にこの場合において、室内の氣温を降下させるとか、電扇を動かして温度を下げるとかする事によつて體温の發散を容易ならしめれば、自然これを緩和する事が出来るのである。室内の理想的温度は肥満した人と瘦せた人によつて、一樣には行かないが、普通の居室においては、大體攝氏十七八度から二十度が適當である。また寢室の温度は居室よりも四五度寒い方が適當し、勉強する場合には更に四五度低い方がよいと考へられて居る。昔からよく「頭寒足熱」と言つて居るが、頭を冷やし足を温めるのは、生理の法則に適つて居るのである。

本箱整理棚の必要

理想的に言へば、小供は各自一つの部屋が必要である。然しさう贅澤を言つて居られない場合もある。で、少くとも兒童には各自の机と、本箱だけは必ず與えてやりたい。彼等は自分の本や學用品を自分で整理し、何人にも犯されない、自分の勉強の場所を、どれほど要求してゐるか知れない。兒童が自分の物に對する所有觀念は、兒童の自己意識を明瞭にする助けとなるものである。人智發達の歴史を尋ねると、それが私有財産の觀念の發達と並行して居る事を發見する。原始人には私用財産の觀念が薄弱であつたが、文化の發達するに従つて、自己の所有權に對する自覺が、明瞭にされて來た。而して自己の所有觀念が確立される處に、自己の意識が確立され、自己の意識が確立される處に、文明の花が咲くのである。かく考へて

くると、兒童の所有權に對する意識を養成する事が、家庭教育において非常に重要な事となるのである。即ち自分の所有物に對する明確なる意識を、出来る丈け早く幼兒に與へるやうに仕向け、これと同時に他人の所有權を尊重するやうに指導する事が、家庭教育の主要なる職分の一つとなるのである。これがためには、どうしても兒童が自分の物として、整理するに必要な最少限度の用具を與へてやらねばならないのである。幼い頃には、先づ玩具類を整理する習慣を養ひ、小學校に入學するやうになつたら、學用品は勿論、帽子、靴、衣服、などの類に至るまで、總て自分のものとして、これを保存し整理せしめる事が必要である。十才前後の兒童は斯かる責任を與へられる事に喜び、これが一面において勉強への好き獎勵となるのみならず、他面においては依頼心を除去し、獨立自治、自學自習の精神を鼓舞する事になるのである。

居室の裝飾と調度品

兒童の部屋は彼等自身をして裝飾させるがよい。彼等は喜んでこれをなすであらう。小供達は時には大人も及ばないやうな、藝術的意匠や趣好を凝すものである。また室内の色彩はなるべく、濃厚なものを避け、淡白で而も明るいものが多い。出来れば季節によつて配色を工夫し、夏は涼しく落付かせるやうな色を選び、冬は稍々濃厚で暖かさを感じさせるやうな色彩を選び、時々變化の感を與へることが、兒童の心機を清新にし、

自然彼等の好學心を旺盛ならしめることになるのである。申すまでもなく、色彩と感情とは密接な關係を有するものであるから、小供部屋の壁色や、天井などの色彩には特に考慮を要する。また小供部屋に用ゐる椅子テーブルなどの什器も、總て兒童の身體に適したものを使用しなければならぬ。机が低く過ぎると勉強の際に前身を屈折し、そのために脊髓の彎曲を來たし、これに反して机が高過ぎると、文字を書く場合に、腕や肩の筋肉が不自然に壓迫され、その結果心身の疲勞を來たし易い。猶ほ高過ぎる弊は脚部が壓迫を受け、血液の循環が妨げられ、そのために倦怠の感を生ずるに至る。故に椅子や机は勿論、兒童の調度品は總て彼等の發達の狀況に應じて作られなければならない。テーブルの高さは普通身長七分の三に五センチ加へたものが適當であると考へられて居る。故に身長一メートルの兒童に適當した机の高さは、一メートルの七分の三に五センチを加へた約四十三センチである。椅子の高さの標準は、身長七分の二となつて居るから、前記の身長一メートルの子供に適した椅子の高さは、約二十八センチである。然し以上は單に平均標準に過ぎないのであつて、實際においては同じ身長でも、胴體の長い人もあれば、また脚部の特に長い子供もあつて、決して一律には行かない。前にも述べたやうに、椅子やテーブルに限らず、總ての家具類を成可く兒童に適合するやうにしたいものである。これも心懸けて居れば、さう困難な事ではない。

數へ年四つの子が、小便を獨りでしなくて困つて居つた。それが男便所の高過ぎるためだと分つたので、高さ四寸ほどの臺を作つてやつたら、喜んで獨りで便所に行くやうになつた。洗面所やお風呂場なども同じ事で、一寸した設備をしてやれば、彼等は寧ろ一種の誇りを以つて、「自分の事は自分でする」事を學ぶのである。

第三十九章 環境としての衣服

衣服と保温

住宅に次いで最も吾人の生活に關係の深いものは、衣服である。従つて家庭教育と、衣服について述べることは徒勞でない。動物の中で衣服を着るものは、人間のみである。衣服は保温と裝飾とを兼ね、鳥に羽毛があり、獸に毛が生えて居るやうに、人間は衣服を着るのである。人間の外皮の温度は、攝氏三十度であるから、無風又は和風の場合においては、外氣の温度が三十度(華氏約八十八度)以上であると、裸體で居つても差支はないが、二十八度以下の温度においては、保温上どうしても衣服を必要とする。

熱の傳導と壓縮と濕潤性

被服の布地を選択するに當つて、注意を要する點は、熱の傳導

と、壓縮率と、濕潤性とである。熱の傳導と言ふ事は、異つた温度の甲と乙との物質間において、温度の高い方から、温度の低い方に向つて熱が傳導する事を言ふのである。この場合或る物質は熱の傳導が良好であり、他の物質は傳導が悪いのである。熱の傳導の良い物質に觸れると、冷たく感ずるのは、人體の熱を急速に奪ひ去るからである。故に保温と言ふ目的から云へば、熱の傳導の悪いものが望ましい。今、空氣の熱の傳導率を一とすると、毛絲は六・一、絹絲は一九・二、麻絲は二九・九である。これに由つて見ると、麻布の傳導率が最も高く、毛絲の傳導率が最も低い。この標準から見れば、毛織物は保温上最も適當であると言ふ事になる。次に壓縮率と云ふ事は、布地の中に空氣を含有する量の多寡を言ふのである。即ち或る布地の壓縮率が高いと云ふ事は、その内に空氣を多量に含んで居ると言ふ事を意味する。空氣が熱を傳導する率は一であつて、非常に低いのであるから、従つて空氣を多量に含有する布地、即ち壓縮率の高いものは、熱の傳導が悪く、保温力が高い事になるのである。壓縮率と言ふ點から見ても、矢張り毛織物が最も高く、次が綿布で、更に絹布、麻布と言ふ順序になるのである。

衣服の材料たる布地が、外氣中より濕氣を吸收する事を布地の濕潤性と言つてゐる。布地が濕氣を持つと、熱の傳導率が高くなり、寒冷を感ずるのである。濡れた衣服や、濕めつた着物を着ると冷たいのは、そのためである。布地によつて濕潤の難易がある。絹布は最も濕潤し易く、次は麻布木綿で、最も濕潤し難いものは矢張り毛織物である。故に毛織物はこの點から見ても、衣服の材料として最も適當である。

保温と布地の色彩

保温はまた布地の色彩と密接な關係を有して居る。布地が同質であつても、染色の相違によつて濕熱の吸收力に非常な差異がある。例へば白色は濕熱の吸收力が低いために涼しく、黒色のものは濕熱の吸收力が高いから、温かく感ずるのである。今白色の濕熱吸收力を一〇〇とすれば、黄色は一〇二、暗黄色は一四〇、緑色は一五二、紅色は一六八、鼠色は一九八、黒色は二〇八となる。これに由つて見ると黒色の濕熱吸收力は白色の二倍強である。以上述べた理由から結論を下せば、黒色の毛織物は最も保温力に富み、冬の衣服として理想的であり、夏季の防着用衣服としては、白色の麻布が適し、春秋の衣服の材料は、綠色や黄色系統の、綿布や絹布が比較的適當して居ると云ふ事になるのである。

帽子の問題

被服を廣義に解釋すると、帽子、靴、下駄、手袋等の、一般被服を含ませる事が出来る。先きに述べた様に、被服の目的は保温であつて、獸類の毛髪や、鳥類の羽毛に相當するものである。故に毛髪のある所には、被服を要せないので自然の原則である。

かく考へて見ると帽子を被ると言ふ事が問題になるのである。勿論鶏に鶏冠があるやうに、裝飾の意味において、人間が帽子を被る事は、是認する事が出来ないでもない。確かに帽子を初めて用いたものは、アメリカン・インディアンなどの様に、威厳を示す爲めに、男子に限つて使用されたものである。然るに最近に至つては裝飾用として、高價な贅澤品が婦人の間に、廣く用ゐられるやうになつて來た。文明は無用な贅澤品を澤山製造し、自然に背いた生活をする事であるとすれば兎も角、自然の法則に叶つた合理的の生活をするとすれば、帽子を被る事は確かに問題である。帽子は温熱發散を妨げ、頭痛や眩暈の原因となり、衛生上から見ても、無用の長物であり、また經濟の見地から考へても浪費である。殊に高價な婦人帽はその弊が一層甚だしい。最近歐米においてもこの弊害に目覺め、帽子を被らない事が流行して居ると言ふことである。然し帽子の必要な場合が全然ないと言ふ譯ではない。初生兒の如く頭髮の薄いもの、頭の禿げたものなどは、保温上帽子を必要とする。また夏季外出の場合にも、日光の直射を避けるため、防暑用として軽い濕潤性の低い、白色系統の帽子を被る事が必要である。

衣服の選擇

衣服は保温の外に、容姿の調整と言ふ役目を有して居る。即ち衣服を常に清潔に保つ事は、自己衛生上必要であるばかりでなく、他人に快い印象を與へ、精

神的にもキチンとした感じを覺へるものである。故に衣服は折目正しく、良風美俗を亂さないやうにする事が必要である。古來「衣食足つて禮節を知る」と言つて居るが、衣服も禮節の表現である事を忘れてはならない。故に徒らに流行に囚はれ、奇矯に走つてはならない。また兒童は着物を汚すから、何んでもよいと言つた様な考へ方は誤つて居る。また赤ん坊の着物と、幼稚園の子供と、小學校に通ふ兒童とはたゞに大小の差だけでなく、型や色合や柄などにおいても、それ／＼異つたものでなくてはならない。その他兒童の性別、身長體重、顔形の場合等を考慮に入れて、選擇しなければならぬ。前にも述べた様に、兒童の身體各部の發達は不規則であつて、或る時は脚部が伸び、他の時には手が伸び、また他の時には胸が太くなると言ふ具合であるから、兒童の被服は成る可く出來合ひを買ふ事を避け、兒童を最もよく知つて居る、お母さん自身が手を下して、彼等の身體に適し、その容姿に似合ふやうなものを作つてやる事が、生理的にも精神的にも望ましい事である。

制服の處女

兒童は活動的であるから、彼等の衣服も、その活動性に適合したものを選ばなければならぬ。殊に今日のやうにスポーツ全盛の時代においては、大體において洋服が兒童服として適して居る。然し服装も色合も、千篇一律になつてはならない。晝と夜、活動する時と休息する時とは、服装も自から異つて居る可き筈である。仕事をするには洋服がよ

いが、寛ぐには和服に越したものはない。また色合にしても、雨が降つて陰氣な日には、刺戟の強い興奮性に富んだ、赤色系統の軽快な衣服を着せると、子供は自然にはしやいで快活に遊ぶやうになる。これに反してはしやぎ過ぎて、亂暴で困るやうなときには、地味な色の着物を着せると、落ちつきが出来てくるものである。故に衣服も場合に應じ、時に應じて、多少變化し取捨されなければならぬ。處が近來制服が流行して、男子ばかりでなく、女學校の生徒まで、制服を着なければ生徒でないやうになつて來た。この傾向は決して褒めた事ではない。衣服の如き人間の生活に重大なる關係のあるものを、一定して仕舞ふと云ふ事は、教育それ自身と矛盾して居る。若し住宅を一定したらどうなるか、また總ての人の食物を一定したらどうなるか、深く考へて見る迄もない。制服の處女達が、社會に出て常識のないのも、種々の失敗を演ずるのも、決して不思議ではない。殊に婦女子の教育は代數や化學などの教育よりも、衣食住に關する教育が主である。衣食住の教育をするのに、衣食住を離れて仕様と言ふのは、「時かぬ種を刈り取らう」とするの類である。制服を辨護する唯一の理由は不經濟だと言ふ事にあるやうである。然し制服でも不經濟にもなれば、制服がなくとも經濟にも出来る。それは家庭教育の如何と、各人の心の持ちやうでどうにでもなるのである。

和洋折衷の禮讓

よく世間で和洋折衷を、二重生活だと言つて排斥するが、これは必ずしも

さう一概に言ふ事は出来ない。自分は寧ろ和洋折衷生活の禮讓者である。男女の仕事着としては洋服は適當であるが、家に歸つて寛ぐ時は、和服に着替へる事は實に理想的である。殊に風呂上りの浴衣などは實に得難いものである。住宅にしても同じ事で、出来れば和洋折衷がよい。これは氣分の轉換のためにも、趣味生活と言ふ點から考へても、心理學的見地からしても、又子女の教育の上から見ても誠に結構であつて、これは日本人にのみ與へられた福音である。世界のどこの國にこんな恵まれた生活があらう。或る人は不經濟であると云ふかも知れない、勿論不經濟にも出来るが、やり方によつては經濟にも出来る。朝から晩まで洋服を着、靴を穿いて居れば經濟であつて、家に歸つて來て、丹前や浴衣を着る事が必ずしも不經濟だとはどうしても思はれない。

衣服の脱ぎ着

衣服と家庭教育について大切な事は、衣服を着たり脱いだりする習慣である。衣服の著脱は、食事と同じく、一生涯の間毎日繰り返さなければならぬ日常の課程であつて、よい習慣を有するものと、悪い習慣を有する者とは、非常に利害得失を異にするのである。故に兒童は出来る丈け早く、自分で着物を脱いだり、著たりするやうに躰けられなければならない。然し着物を脱いだり著たりするのも、一種の學習であつて、漫然として居つては容易にやるものではない。それには矢張り早くからボタンのはめ方、ホックのとめ方、下着や靴下や、パ

ンツやスウェーターなどの著方を、練習させたり、獎勵したりしなければならぬ。それが出来るやうになつたら、脱いだ着物の整理をやらせる事が必要である。こんな事は如何にも些事のやうであるけれども、然も最も基礎的の學習であり、習慣であつて、この簡単な基礎の上に高尚な習慣や、自學自習の態度が建設されるのであるから、決して等閑にしてはならない。如何なる事でも一足飛びに行くものではない。「いろは」を知らないで、日本語を學習する事が出来ないと同じやうに、衣服や食物などのやうな日常生活に對して、適當なる習慣と、常識がなければ、決して大成することは出来ない。

衣服の量の研究

最後に厚着の弊を述べてこの項を終る事にする。前にも述べたやうに、人間の外皮の温度は攝氏約三十度であるから、外氣が二十七八度以下の場合には、保温上どうしても衣服を着なければならぬ。然し世の母の常として、病氣をさせまい、風を引かせまいと、心配し過ぎて、必要以上に厚着をさせるものである。その結果却つて皮膚の抵抗力が非常に弱くなり、一寸した事にも風を引いたり、病氣に罹つたりするのである。厚着の悪い第一の理由は、厚着をすると皮膚面から放散する熱量が減退すると言ふことである。熱量の放散の減退は身體内のカロリーの燃焼を不活潑にする。身體内のカロリー燃焼が不活潑になると食慾が減退

し、食慾が減退すると身體の衰弱を來たすのである。これに反して薄着の習慣をつけると、皮膚面より發散する温熱の量が多くなり、その温熱を補充するために、カロリーの燃焼が自然に活潑になつて來る。従つて食慾が増進し、健康も増し加はるのである。然し衣服の量は時と場合とによつて決して一樣には行かない。空腹の時や疲勞して居る場合には厚着を要し、満腹の時には薄着の方がよいのである。殊に夕方遊び疲れて空腹になつて歸つて來た時は、最も注意を要する。風を引くのは大方この時である。また兒童の年齢の相違、肥つた子供と、瘦せた子供と、女子と男子とでは自ら衣服の量を異にする。衣服の量について統計的に研究した學者に、ポウデツチ氏とポールドウイン氏とが居る。前者がサンフランシスコの兒童について調査した結果に據ると(靴を除いて)、満七才の子供の衣服の平均總量は、男子も女子も三・五封度(一封度は約百二十匁)、満十才の男子は五・七封度、同女子は四・五封度、満十六才男子は九・七封度、同女子は八・一封度となつて居る。又ポールドウインがマサチューセツト州の兒童について調査した結果に據ると、幼稚園時代の兒童の衣服の平均總量は、男子においては體重の三・五パーセント、同女子においては三・五パーセント、小學校時代の男子は體重の四・五パーセント、同女子は二・五パーセント、中等學校時代の男子は三・五パーセント、同女子は二・五パーセントとなつて居る。以上はその儘我國の兒童に適用する事は

出来ないが、多少の参考とする事は出来る。これに由つて見ると兒童の體重と衣服の重量との割合は、兒童の年齢に従つて異つてくる事を知るのである。即ち幼少の時は體重に比して、衣服の量が比較的多く、兒童が成長するに従つて、衣服の量が少くなり、青年期に達すると百分率から言へば、幼兒期の約半分に減るのである。また男女の性に由る衣服の量の差も顯著である。一般に女子の方が男子より薄着であるが、殊に少女期から青年期にかけて、その量が激減し、男子の六割乃至五割となる。

第四十章 家庭における金錢教育

金錢教育の重要性

金錢問題は人生にとつて、最大の關心事の一つであり、金錢は力の蓄積を意味し屢々日常生活を支配する最大の動機であつて、人生と金錢とを離して考へる事は困難である。而してこれを正しい手段をもつて獲得し、これを正しい目的のために使用する事は、たゞに金錢そのものためだけでなく、社會問題としても、また道德問題として重要な事である。社會における大部分の犯罪は金錢問題に起因して起るのである。また個人間

の道德にしても煎じ詰めて見れば、その根柢には金錢問題が潜んでゐる。かく考へて見ると、金錢に關する適當なる智識と習慣とをもつて居ないものは、家庭の人として、また社會人として不適當であると言へるのである。處が學校は勿論、家庭においても、從來この方面の教育訓練を等閑視して居る事は遺憾である。近來政治界教育界に頻々として起る贈收賄の問題なども、その根本原因は金錢教育の缺陷にある。

私有財産の所有權の觀念は、人間の個性の自覺及び發展に大切な役割を勤めて居る事は、既に述べた處である。所有權の觀念を與へずして、兒童の責任感や道德觀念を養成する事は不可能である。共產主義者の言ふやうに、私有財産制は生存競争を激化する傾向はあるが、然かも人間の進歩發達には必要缺く可からざるものである。従つて金錢に關する訓練を欠いた教育は、恰も龍を畫いて眼睛を轉じないのにも等し。

私有權を尊重させよ

所有權に關する兒童の觀念は、年齢と共に進歩發展する。二三才頃の兒童は金錢に對する價値を理解する事は出来ない、彼等には五十二錢の銀貨も一錢銅貨も大した區別はなく、單に一種の玩具に過ぎない。殊に紙幣などを與へても、廣告のピラと何等辨ぶ所はない。この頃の子供に五錢白銅一枚と一錢銅貨二枚とどちらがよいかと

尋ねれば、勿論一錢銅貨二枚をとるのである。然し彼等でも所有物に關する觀念は臆げながらもつて居るのであつて、例へば自分の玩具をとられると泣き出したり、怒つたりするのはその現はれである。故に幼児に金銭教育をする事は出来ないが、所有權に對する教育をする事は出来るのである。また金銭教育の前提として自分の玩具やその他の所有物を大事に保管整理させ、他人の玩具や所有物を尊重するやうに指導し訓練する事が必要である。よく他所から子供がお客に來た場合などに、自分の玩具をとらうとすると、兒童はとられまいとして喧嘩になる。そんな場合に側に居る母なり姉なりが、無理に子供からとつて貸し與へようとする事があるが、それは兒童の所有權を無視したやり方であつて決してよい事ではない。兒童がかゝる取扱ひを受けると、こんど機會のある時に、他の子供のものをとるやうになり、他人の所有權を尊重しなくなるものであるから、兒童の自發的行動を促がす様に仕向くべきである。

家庭の暮し向を知らしめよ

多くの家庭の子供は金がどうして得られるものか、又自分の家の収入はどの位あつて、どう云ふ風に消費されて居るのか知らない場合が少くない。殊に都會に住む子供等は、家庭の經濟状態に對して無頓着であり、無智である者が多い。また時には父母の誤つた愛から、家庭の苦しい經濟を子女には知らせたくくないな

どと考へる事もある。その結果種々の弊害が起るものであるから、なるべく早い機會において、家庭の經濟の大略を子供等に知らせて置かなければならない。これは子供に金銭教育を興へる上に於いて必要缺く可からざるものである。出來れば時々豫算會議のやうなものを開き、子女達もこれに参加させて、收支の状態を明かにして置く方がよい。かく子女達が家庭の經濟の有様を知り、豫算の作成に參與すれば、自然彼等はこれに興味をもち、責任を感じるやうになるのである。金銭教育の立場から見れば、富貴の家庭に育つ子供もよくないが、餘り貧し過ぎる家庭に育つものも不利であつて、中流の家庭に育つ子供等が最も健全である。また同じ中流の家庭でも、直接財貨の生産に參與する、農工商業者の家庭と、俸給生活者の家庭とは趣を異にして居る。また同じ收入のある家庭でも、非常に節約で吝嗇の家庭もあり、これに反して贅澤な家庭もあるが、何れにも偏せずして中庸を守る事が必要である。

多くの家庭の教育を見ると、特に意識的に金銭教育をやつて居る場合は少なく、多くは小供の必要に應じ、彼等からねだられる度毎に少しづつ不規則に與へて居るやうである。これがために親子の間に絶えず悶着が起るのである。子供の方では父母の小遣のくれ方が不足だと言つてねだり、父母は子供達が金銭を浪費すると言つて叱るのである。かくする内に子供等は自分の欲望を満たすた

めに、両親を欺いたり嘘を言ふやうになつたり、遂には親の金を盗んだり、甚だしくなると他人の金をも盗むやうな事がある。故に兒童には一定額の小遣を與へ、これを組織的に使はせるやうに指導することが必要である。

定額小遣を支給する方法

兒童に一定の小遣を渡す事は何歳位から始める可きであるか、又どう言ふ風に與へる可きであるかと言ふ事は、金錢教育において重要な問題である。家庭における金錢教育と言つても、一定した制度がある譯ではない。臨機應變でよい。自分の経験によれば、年齢に應じて幾つかの階段に分けて考へられなければならぬ。先づ小學校三四年位から始める事が適當である。初めの中は一ヶ月何程と言ふ事でなく、半月毎とし一ヶ月を二回位に分けて與へる方がよいと思ふ。中等學校入學の頃からは一ヶ月何程として給與しても差支へない。また金額においても、その買物の範圍においても年齢によつて區別されなければならぬ。例へば小學校三年の兒童の場合は半ヶ月一圓乃至一圓二十錢とし、これによつて支辨する範圍も文房具代を主とし、これに玩具や娛樂費をも含ませる。定額の小遣をもつてお菓子やその他の食物を買ふ事は避けなければならぬ。食べ物家庭に備へて置く方がよい。小學校五年頃からは同じく半ヶ月標準として、一圓五十錢乃至一圓八拾錢とし、文房具娛樂費の外、靴下と

か言ふ程度の日用品をも含ませるやうにし、更に中等學校時代の子女には、一ヶ月標準として、月五圓とか六圓とかの額を定め、文房具、娛樂、日用品の外に、或る程度の被服をも含ませるやうにする。兒童に定額の小遣を與へる際には、これによつて支辨す可き範圍を明瞭に決めて置くことが肝要である。例へば通學の場合に電車賃の支辨はどう、辨當を買ふ場合はどう、また被服でも、その内に靴も含んで居るかどうかなどを一々豫定さして置くがよい。

贈與か報酬か

定額の小遣を與へる場合に、これを小供達の家庭における手傳の報酬として與へるかどうかは、可なりデリケートな問題である。若しこれを報酬として與へるとすれば、小供に勤勞の習慣をつける場合もあるが、學童達の家庭に居る時間は比較的少なく、多くの場合彼等の勤勞は小遣に値しないのである。また若し定額の小遣が勞力に対する報酬だとすれば、小供が怠つた場合にはこれを減額しなければ意味をなさない事になる。然しかゝる事は實際において煩に堪へないものであり、又若し出來るとしても親子間の關係を物質化し、家庭生活を冷やかにして面白くない結果を來すであらう。然し何時も定額の小遣だけでは、兒童の生活を單調にし、また勤勞の生活を養成する事も出來ないから、定額主義と報酬主義とを併用する事が最もよいと思ふ。即ち一定の小遣の外に特別の仕事をした場合には、この特別の仕事に対する報酬とし

て臨時に小遣を與へるのである。而してその仕事の種類や時期は時に依り變に應じて適當に安排されなければならぬ。例へば暑中休暇に海岸へ行くために特別な費用を要するやうな場合には、豫め特別な仕事をこしらへてやり、その報酬として必要な額の金が出来るやうにしてやるのである。例へば郊外や田舎に住むものは、兎や鶏などの飼育によつて金錢を儲ける事が出来る。これは兒童にとつて興味のある事である。著者は中學の二年級の頃に十個の卵子を母から貰つて、これを孵化させて七匹の鶏を育て上げ、それに卵を生ませて六圓餘の金を儲けた事がある。子女は自分の努力をもつて金を得る事によつて、金錢の價值を知ると同時に、勤勞に對する眞の喜びをも感ずるものである。然しこの場合において注意すべきことは、彼等の勞働を高く見積り過ぎてはならないと言ふ事である。また勤勞に對して相等の金を報酬として支拂ふ事は差支はないが、泣かなければお金を與へるとか、苦いお薬を飲めば報酬を與へると言つた様な、消極的な不生産的の事に對して金を與へる事は、精神的に悪いばかりでなく、金錢の價值に對して間違つた觀念を與へるものであるから避けなければならぬ。

遣ひ方の指導

金錢はこれを獲るよりも、これを有効に消費する事の方が一層大切であり、また六ヶ敷いものだと言はれてゐる。従つて兒童に月々與へる定額の小遣錢

を遣はせる場合に、全然自由勝手に小供に遣はせたらよいか、それとも父母に相談した上で遣はせる方がよいかと言ふ事は、金錢教育上一考に値する問題である。原則としては一旦與へた小遣は、小供の自由に遣はせなければ意味をなさないのである。若し父母が一々干渉するならば、小遣など頂かないで、必要な時に貰ふ方が氣樂であると言ふ事になり、秘密に金を使つたり、嘘を言ふやうになつたりするのである。然し小學校三年位の生徒は全然自由にする事も危険であるから、買物の場合には父母や兄弟の意見を參酌して使はせ、だん／＼買物に馴れるに従つて自由に使はせて差支へない。勿論小供は屢々失敗を繰り返す。然し失敗によつて彼等は學ぶのであるから、失敗を恐れてはならない。また買物はたゞ安價のものさへ買へばよいと言ふ譯ではないから、その邊の指導も必要なことである。

小遣帳の記入

次に金錢教育において必要な事は小遣帳をつける事である。小遣帳をつけるのは、單に収入と支出を明かにし、計算を正確にするばかりでなく、支拂つた項目を明細に記入して置く事は將來の參考ともなるものである。また誰しも馬鹿らしく使つたお金の支出を記入する事は躊躇するものであるから、小遣帳を正確につけるやうになると、自然馬鹿らしい金を使はなくなるのである。故に小遣帳は成る可く早くつけるやうにすることが望ましい。

大體において小學校四五年の頃からつけ始めることが適當であるが、遅くとも中等學校に入學したなら、必ず小遣帳をつける習慣をもたせなくてはならない。折角定額の遣を與へても小遣帳をつけないければ、金錢教育の目的の大半はなくなる譯である。また小遣帳をつけることは（綴方や數學の學習に興味を起させる方便となり、規律正しい性格の訓練のためにも、また將來小遣を使ふ上において良き方針を立てるためにも参考となるのである。小遣帳は簡単な金錢出納帳の形式でよい。即ち月日を左の端に書き、次に摘要と言つて何んのために使つたとか、何處から收入したと言ふ事を記入する欄を設け、次に收入金額の欄と、支出の金額の欄と、最後に残高の欄を設ける。而してその残高と現金とが常に合ふやうになつて居ればよいのである。

貯金の習慣と貸借

金錢教育は主として、正しく且つ賢く、金を使用する事を訓練する事が目的であるが、小遣の内から幾分づゝ貯金する事も奨励しなければならぬ。貯金はたゞ貯金として、子供の將來の學資や嫁入りの資金に役立つと言ふだけでなく、貯金の習慣を養成する上において、必要な訓練である。如何なる場合にも小遣の前借りをしたり、借金を許してはならない。また父母においても、なるべく子女の小遣錢を借りない様に注意しなければならぬ。よく釣錢などの不足した場合に、小供から二十錢三十錢と、金を借りる事がある。

これが度重なると、子供も人から金を借りる事を、何んとも思はなくなるものである。若し萬一子供から金を借りた場合には、忘れずに返済しなければならない。父母が與へた金だから、少しは借りても返さなくてもよいなどと考へる事は、子女の金錢教育上に非常に悪い影響を來すものである。貯金をする場合において、貯金の目的を明かにして置かなければ決して獎勵にはならない。初めの内はその目的もなる可く、具體的であり卑近でなくてはならない。例へば來月ピクニックに行くために金を使はずに貯へて置くとか、また何か兒童の興味をそゝる様な事物と貯金とを結びつけ、成長するに従つてその目的が高尙になり、また待つ期間も一ヶ月から三ヶ月、半年から一年と言ふ風に、だん／＼長くする様に指導しなければならない。また小遣や貯金は單に自分のためだけでなく、神社佛閣に對する獻金や、社會事業や國家の事業などに、幾分でも寄附するやうにしなければならぬ。かく貯金は單に貯金のためとせずして、目的のため主義のために消費するやうに、小さい時から訓育されなければならない。

私の經驗

以上に述べた金錢教育は單なる想像でなくて、著者が過去數年間の實際經驗に基き、多大の効果を收めた體験を語つたのである。自分が子女に定額小遣を與へ始めたのは小學校三年からである。然し男子の場合は女の子より多少遅くても差支ない。大體におい

て男の子は女子よりも金銭に無頓着であり、また金銭の觀念に疎である。初めて定額小遣を與へた時には、多少危んだのであつたが、やつて見ると決して心配した程の事はなく、金があるからと言つて決して浪費はしなかつた。寧ろ定額の小遣を與へなかつた頃より、儉約するやうになつたのである。また金銭の使ひ方は親の模範が深い感化影響を及ぼすものである。父母が贅澤で浪費家であると、子供も浪費する様になり、これに反して両親が吝嗇であると、子供達も吝嗇になるものであるから、何れにも偏せず、中道を歩むやうに注意しなければならぬ。

兒童は自己の興味に従つて買物をなし、金銭を消費するのである。而して兒童の買物は、彼等の品性を表示するバロメーターであるから、兒童が如何なる事に興味を有し、如何なる性格を有するかを知るには、彼等の金銭の消費の状態によつて察知する事が出来るのである。或る子供は書物や文房具のためなら、金を惜まらず消費し、他の子供は衣服や裝身具に金を浪費し、また他の子供は娯樂のために大部分の金を使ふのである。自分はよく少年少女達に、若しこゝに百圓のお金があつたとした場合に、これをどう言ふ風に消費するかと言ふ様な質問を發し、彼等の答を得て、これによつて彼等の品性の一端を知り、もつて彼等の訓練指導上の参考として居る。

附 録 精神衛生について

教育の根本目的の一つは何んであるかと言へば、身心の健康であると思ふ。人間の智識も技能も健全なる身心の基礎の上に立たなければ、意味をなさない。スタンレー・ホールは「人若し全世界を得るとも、その健康を失はば何んの益あらんや」と言つて居るが、誠に至言である。

處が本書において述べた事によつても、肉體の健康と精神の健康との間には、離すことの出来ない密接な關係のあることを知るのである。昔から「健全なる肉體に健全なる精神が宿る」と言つて、體が健康であれば、精神も自然健康になるやうに考へられて居つたが、これはたゞ半面の眞理を現はして居るに過ぎない。人間の生活には自から他の一面がある。即ち身體の健康が精神の健康に關係があるやうに、精神の状態如何がまた肉體に深い影響を與へるのである。従つて健康なる肉體を保つには、どうしても健康なる精神を要する事になる。故に「健全なる精神は、健全なる肉體を齎らす」と言ふ事も出来るのである。この事實は殆んど説明を要しないほど明瞭である。従來衛生と言へば、やれ運動がどうの、空氣がどうの、微菌がどうのと、肉體の衛生のみに限られて居つた

が、これは確かに片手落である。どんなに空気がよくても、運動をしても、煩悶をしたり、悲しんだりして居つては、身體の健康を保つ事は出来ない。そこで身心の健康を保つには、肉體の衛生と同時に、精神の衛生と言ふ事が、非常に必要となつて来る。

精神衛生と言ふ事が初めて唱へられたのは、今より約二十五年前の事である。米國のエール大學の卒業生でピーヤスと言ふ人が精神病に罹り、病氣恢復の後、自分の精神病で悩んだ體驗を書いて出版し、率先して精神病防止運動を起し、その翌年即ち千九百九年には初めて精神衛生學會が組織されたのである。この運動は非常な勢ひで米全土に擴がり、更に海を越えて歐洲に渡つた。數年前我が日本においても精神衛生學會の設立を見るに至つた。千九百二十二年には國際精神衛生學會が組織せられ、日本もこれに加盟してその會員となつた。千九百三十年には第一回國際精神衛生學會大會がワシントン市に開かれたのである。

精神衛生の運動は學問の方面において、精神病理學の方面のみでなく、心理學や社會學の支持を受け、殊にフロイドの創唱にかゝる精神分析學によつて、非常な光明を與へられたのである。その結果として今日においては、その範圍も單に精神病の防止のみでなく、總ての精神異狀に及び、大人精神よりも兒童の精神狀態に一層の注意が拂はれるやうになり、遺傳的精神病と同時に、教育

や躰のために起る神經衰弱などにも手をのばすやうになつた。その結果米國においては、チャイルド・兒童精神衛生相談所と言ふやうな施設が各地に設けられ、精神衛生が頓に一般化して來た。然るに我が日本においては今なほ歐米に比して、この運動が非常に後れて居る事は遺憾である。吾人は我が國の兒童教育のため、精神衛生の可及的普及を切望する次第である。

人間の精神の正常なる状態は、その統制を保たれて居る時である。これに反して個人の精神が分裂した状態にある時は、明かに異常である。故に精神衛生の根本問題は、成る可く精神の分裂を來たすやうな刺戟を避け、統一又は集中の出来るやうな環境を與へる事にある。吾人が本書において述べた處は、主としてこの精神衛生の立場から出發して居るのである。

然らば精神衛生上必要缺く可からざる、精神の統一は何によつて得られるかと言ふと、先づ第一には、興味を持ち得る具體的の仕事に携はる事にある。兒童の心は具體的であつて、抽象的の命令や教訓を理解する事は出来ない。従つて彼等は理解の出来ない事には興味をもたない。興味のない事を無理にさせると精神の統一が破れて、分裂を來たすのである。例へば生徒が教場にあつて、先生の講義を聞いて居つても、その講義が抽象的で興味を感じない場合には、心は自然に講義以外の興味ある追想に向ひ、身體は教室に在り乍ら、精神は街頭を彷徨する。斯様にして精神の分裂が行

はれるのである。若しこの状態が長く繼續し、習慣的になると遂にこれがヒステリヤ及び神經衰弱の原因となる。これに反して興味のある仕事に従来する事は、兒童の精神を集中させ、これに統制を與へ、精神衛生上最も望ましい状態で良き効果を齎らすものである。

次に精神衛生上重要な事は遊戯である、元來兒童の遊戯は一種の仕事である。仕事と遊戯との區別は、爲す事の相違ではなくて、物事を爲す態度の相違である事は既に述べた所である。例へば繪を一枚書くにも、興味をもつて描けば遊戯となるが、いや／＼乍ら衣食の資を得るために畫く場合には、それが仕事となる。また子供達が家事の手傳をするにも、その手傳に興味を感じてやれば、それは遊戯となる。かく考へ來たれば、遊戯は「興味のある仕事」の別名である。而して興味のある仕事は精神衛生の好條件である事は前節に述べた所である。これはたゞに兒童に限つた事ではなく、青年も大人もみな日常生活に興味をもち、日々の務めをなす場合に仕事としてでなく、遊戯の形式をもつてなすことが精神衛生上好ましい事である。殊に婦人が日々の炊事仕事や、家庭の瑣事に携はる場合にも、子供達がマ、事でもやるやうな氣持でやれば、身心の疲勞を防ぎ、いつも爽快な氣分を保ち、身心の健康を増す。またかくすることによつて所謂意志の訓練と言ふ事も出来るのである。従來意志を養ふには、嫌ひな仕事を無理にさせる事でもあるかのやうに考へて來たが、これは

大なる誤りである。子供に嫌な仕事を與へれば精神の分裂を來たし、それが習慣になると、何事につけても仕事を嫌ひ、遂には意志薄弱者となる。これに反して幼時によく遊ぶ子供は、何事にも興味をもち、それが習慣となり、少し位の困難な事にも堪へて、よく學びよく働く意志の強い人間となるのである。かく兒童の遊戯は精神の鍛鍊上重要な役目をもつて居るものであるから、子供達が一心不亂に遊んで居る場合には、父母の不便や不快は成可く忍耐し、彼等の遊戯に干渉せず放任して置く方がよい。また青年に達した場合には、庭球や野球のやうな、健全なる遊戯をなし、老後に至るまで娛樂をもつと言ふ事が、精神衛生は勿論、延いては肉體の衛生上にも肝要である。

兒童の行動に統制を與へるために、必要な第三の條件は、學校における彼等の學習と、家庭における日常生活との間に連絡をつけ、これに一貫した目的を與へる事である。これがためには家庭と學校との密接な連絡が必要である。家庭においては學校の教育方針は勿論、兒童が日常學習して居る學課の狀況を知り、また學校としては生徒の家庭における状態を知り、彼等が家庭にあつてやつて居る行動を察知し、相互間の連絡をとる事が必要である。これは小さい事のやうであるが兒童の精神衛生上大切なことである。若し學校では非常に嚴重な取扱ひを受けて居るが、家庭に歸ると自由であるとか、或は父母の教育上の意見が、學校の教育方針と一致しない場合や、家庭では宗教的

信仰を鼓吹して居るが、學校では無頓着だと言ふやうだと、自然學校と家庭との間の矛盾が、子女の心に反映して、精神の統制を亂し、神経衰弱の原因となるのである。著者の知つて居る或る女學校へ、曾て料理屋の娘が入學した事がある。入學の當初は別に變つた點はなかつたが、時を経るに従つて家庭の雰圍氣と學校のそれとの矛盾が生徒に反響して、二三年生の頃には家庭から離れて親戚の家から通學するやうになり、四年になつた時には強度の神経衰弱にかゝつて退學して仕舞つた。かく考へて見れば父母が子女の學校を選択する場合にも、周到なる考慮を要することが明かである。

兒童の行動に統制を與へるために必要な第四の條件は、兒童の行動や學習に、目的や理想がなくてはならないと言ふことである。目的のない處には統一はあり得ない。目的とか理想とか言ふことは、ある意味において、學習や仕事をなす時の心の態度であると言ふことが出来る。數學を勉強して居る時に、勉強の目的が明確に兒童の心に把握されて居なかつた場合にはどうであらうか。また學校や家庭において種々な規則を設けて、兒童の行動を束縛する場合に、彼等がその理想とする所を知らなかつたとすれば、到底これが行はれないのみか、彼等の精神の統一を破壊し、精神上不衛生となるのである。今日の學校教育はこれ等の點において非常に無理があるやうに思はれる。考

へ方によつては、現在の學校教育は寧ろ神経衰弱製造所の觀がある。折角府立に入學したとか、大學を卒業したとか喜んで居る中に、強い神経衰弱にかゝつて、不孝な死を遂げる人が少くない状態ではないか。

健康なる精神を保つに必要な第五の條件は、良いお友達をもつと言ふ事である。申すまでもなく人間は社交的であつて、自己と同趣味同年輩の、お友達と交はる事によつて非常な満足を感じるのである。従つてお友達と交際し、社交的態度を養成する事は、精神衛生にとつて重要な事である。孤獨的で、非社交的の子供は決して正常な子供とは言はれない。この事實は神経衰弱にかゝつて居る子女を観察すれば明瞭である。彼等は一般に獨居を喜び、非社交的である。獨り育ちの兒童や、病氣などのため、幼時にお友達と一所に遊ぶ機會のなかつた子供は、この意味において精神的に不衛生なのである。故に幼兒から家庭を解放し、成る可くお友達と交はる機會を與へてやらなければならぬ。

又感情の均衡を保つ事も、精神の健康に必要な可からざるものである。この事は既に第三篇において述べたから、こゝにこれを繰り返す必要はない。西洋の諺に「人を怨み憎んで生活するほど貧乏な生活はない」と言ふ事がある。この諺の意味は種々に解釋する事が出来るであらうが、精神

衛生の方面から見れば、人を憎んだり怨んだりする事は確かに精神的浪費である。これが長く続けば自分の仕事や、身心の健康に迄も影響し、延いては一身一家の破滅の原因ともなるのである。一家を滅ぼす位不経済の事はない。故に人を怨み憎む事は贅澤な生活をして居ると同じである。故に平素清浄なる感情をもち、人の悪を思はず、不平も不満をもたないやうに、工夫をして生活する事が必要である。「仁者は命長し」とか言ふのはこの邊の消息であらう。たゞに憎んだり怨んだりするばかりでなく、人を妬んだり、悲しんだりする事も、精神の分裂の原因となり、精神上不衛生であるから注意を要するのである。普通我々が煩悶と言つて居る事は、矛盾した二つ以上の願望が殆んど同時に、同じ位の強さで起つた場合の精神状態を言ふのである。「ふぐは食ひたし命は惜しし」と言つたやうに、兩立する事の出来ない相反する欲望が同時に起ると、心が分裂して相争ひ、葛藤が生じて精力を浪費するのである。故に煩悶や悲觀が長く續けば、遂には神経衰弱となり、生命の存続にも影響を與へる事になる。殊に兒童の精神衛生上大切な事は、彼等が幸福であると言ふ事である。幸福な子供は決して悪い子供にはならない。幸福な子供の身心は健康に育つのである。子供を幸福にする事は、決して物質のみの問題ではない、父や母の一寸した注意から彼等を幸福にする事が出来るのである。

實に今日の時代を「神経衰弱時代」と言ふほど、神経衰弱の多い現代である。その原因は昔に家庭教育だけでなく、社會的にも、また学校教育にも欠點があるのである。殊に都會地に住む兒童は、多少神経衰弱にかゝつて居ないものはないと言つても差支ない。近來教育熱の盛んになるにつれて、この傾向が一層甚だしくなつて來た、その結果家庭的にも社會的にも、種々の悲惨事が續出してゐる。我々の知つて居る狭い範圍でも、息子が慶應を卒業して二ヶ月目に死んだとか、折角帝大を卒業したが、強度の神経衰弱やで遊んで居るとか言ふやうな事が澤山耳に入つて來る。また三面記事を賑はす青年男女の自殺、心中は何を物語るか、考へて見れば由々しき社會問題である。

神経衰弱にかゝつた子供は、先づフラ／＼して些細な事に感情が動かされ、屢々両親や教師に對する反抗心となり、また時には神経過敏となつて、一寸した事でも氣にかけ、無暗に勝氣になつたり、無茶に勉強したり、一般に感傷的センチメンタルとなる。それが過ぎると、物事に倦き易くなり、感情は強いが意志が弱く、心配性となり、空想的となり、非社交的となり、引込思案となる。また安眠が出來なくなつたり、時には他人に傷害を與へたり、物を盗んだりするやうな、非社會的な不良行爲ともなるのである。世上を騒がす青年男女の不良行爲や、左傾思想も、その背後に神経衰弱と言ふ病氣が原因をなして居る場合が少くない。更に進むと以上の各症状が益々激しくなると共に、著し

く夢想的となり、妄想家となり、白日中幻夢を見たり、自分の崇拜して居る人の聲が聞えたり、平素恐れて居る人の姿が眼前に現はれたり、強迫観念に襲はれたり、また靈魂と物語つたりするやうになる。かゝる症状が現はれるのは可なり重症であつて、これをその儘に放任して置くと自己意識を失ひ、自他の區別を喪失して、遂には精神病となり、恢復する事が困難である。故に成る可く早期において、手當を施さなければならぬ。手當と言つても神経衰弱の治療は、所謂心の病氣であるから、精神的の治療による事が効果的である。神経衰弱の治療に當つて最も大切な事は、その根本原因を調査發見する事である。これがためには精神分析をしたり、日常の行爲や家庭における状況を知らなければならぬ。その原因が判明さへすれば、これを取除く事によつて、比較的簡単に全癒するのである。

昔から身體に故障のある事を、「病氣」と言つて居るほど、身體の故障と氣を病む事とは密接な關係が結ばれてゐる。我々が日常見聞する病人や、病死者を見ると、その原因が屢々一寸した家庭の誤つた躰けの結果であることがある。それが心の煩悶の種となり、精神上の不衛生となり、全然主觀的原因から病氣をしたり、病死したりするのである。かゝる意味の病死は或る意味において自殺と何等異なる事はない。左に二つの實例を引いてこの消息を述べて見る。

第一の例は數十萬の資産を有するW氏の家庭に起つた出來事である。兩親とも賢くまた立派な方で、父は東京市内の某區の區會議員をした人である。夫婦の間には不幸にして子供がなかつた。それで夫人の姪に當るK子さんを四歳の時に、養女として迎へ入れた。家庭は至極圓滿でK子さんは美しく賢く、養父母は彼女を眼の中に入れても痛くないやうに愛して居た。W氏の家庭は事業の關係上男女の雇人が數人出入して居つた。その中にはHとふ青年と交つてゐた。家庭におけるK子さんは獨り育ちで、遊び相手もなく、優しく淋しく成人して來た。斯てK子さんは高等女學校も優良の成績で卒業し、某女學院の家政科を卒へて、芳紀正に二十二歳となり、數ある婿の候補者の中から、父母の眼がねに叶つた某工學士と婚約が成立し、愈々結婚式と言ふ二週間前に、突然病氣になり、病む事僅か三ヶ月餘りでこの麗人は無言のままこの世を去つてしまつた。その後著者は亡き人の記念として寫眞帖を贈られた、その劈頭にK子さんの病床記録が掲げられて居るので、一讀して見ると、著者の頭にK子さんの死の原因がピンと分つたやうに感じた。娘をもつ親達の参考のため、原文のまま左に掲載する事とする。

病床の記憶

發病當時

十月初旬風邪の氣味で半日位寝た事もありましたが、何分當時の家庭は本人の婚儀が目前に迫り、それに忙殺され、殊に本人自身も大した事もない様子で、其頃頻りに來訪されるお客様は何れも自分の爲めなので、心より謝し、晴々とした元氣で挨拶等に出て居りました。

十五日の朝少しく氣分が勝れぬと言つて床に就きました。午後母が檢温して見ますと八度二分程ありました。早速近所の醫師に診て頂き、翌日來診の節、十一月三日擧式の次第を話し一日も早く治したいからとて手當方法を伺ひますと、其れでは念の爲めに大家にも診て頂き度いと話されました。其翌日立合を求め診察を受けました。

其時の先生の仰せには、何分安靜を必要とするから、本人を何より吞氣に療養させるに限る、と申されました。醫師は二階八疊の東南向の室を病室に當てられるなら寧ろ入院にも優り好都合であるとの話で、直ちに病人を移し、同時に一家を擧げて看護に努め、

結婚式は一時延期する事としました。

從來本人は、毎朝務めの一つとして必らず聖書を繙き、お祈りするを習慣として居りました。此際父も共に祈る事は、元來多忙な父の事とて、終日病床を見舞はれぬ日もあるので、双方の爲めに良い事と氣付き、十一月初めから缺かさず、朝の八時半規則的に實行して居りました。

本人も毎朝父の來るのを待ち、祈りを済まし、晴やかな顔をして、母や看護婦を相手に笑ひ話をし又諸方より御見舞下されし花や人形を並べ興じて、病氣など忘れた様に見受けらるゝ日が度々ありました。

斯様な有様故、病氣も意外な成績で快復に向ひ、先生方は來診の度毎に、大變好くなつた、とのお言葉に、家族の喜び一方ならず、此上は寒氣の期節さへ無難で通ればと、日當り好き二階二間を天地とさせて居りました。

十二月になつてからは一層快方に向ひ、終日五六時間位起きて居ても何の異狀なく、年の暮等は母の忙しさを見て「お花位活けられるから整へて頂戴」と云ひ、花を活け、又、日頃好んで居た柄の着物を取寄せさせ髪も結び、「お母さんよりお二階のお正月の方

が手廻しが好いわ、お先に失敬した」等と正月気分も出て、三ケ日も頗る元気で、學校時代の事ども手眞似ね、口眞似ねして一家の者を笑はせ、何となく晴々しさをを見せて呉れたのであります。

一月

恰度五日の朝、看護婦が「今朝の體温が急に三十九度近く上りました、お嬢様には申しませんが直ぐ先生に来て頂く様に」との事で、一同非常に驚き、直ちに來診を求めました。醫師は「月經の來潮らしい」との事で一先づ安心して其経過を待ちました。

五日と過ぎ、十日と過ぎても一向熱が下らず、不安の内に二十日となりました。打續く熱の爲め家族は心を痛むるのみ、どうする事も出来ませんでした。其頃漸く陽に大陽加答兒を起して居る事が發見され、其夜から手當も投薬も變更されました。幸ひ、其後一週日の後平熱に復し、一同愁眉を開きました。

今より考へれば實に取返しもつかぬ事で、月末には餘程の衰弱を來し、何んもなく樂觀出來ない感を抱く様になりました。

二月

初旬より食事は醫師の注意と、本人の嗜好を一層考慮し、あらゆる苦心を重

ねて來ましたが、眞に食慾のあると覺ゆる日は少く、日毎に衰弱が加はるので、家族、親戚の心痛一方ならず、只管食慾の増進を念じて居りましたが、病狀は一進一退の経過を辿り、何分快方に向ふ曙光を認むる事が出来ませんでした。

三月

此際全然他の醫師の診断を仰いで見ては、と親戚知己からの切なる薦めに依り、新たな博士によりて専心手當を受ける事にしました。十四五日頃までは從來と大差なく、本人はまだく元気で、漸次暖かき日の到來を喜んで居りました。然るに十五日の夕方胃の疼痛の爲め食事取れず、せめて果實汁でもと母の心盡しに漸く少々飲んで呉れました。翌日醫師の話に「どうしたのか胃が二錢銅貨位非常に固くなつて、加答兒を起して居る。あれでは食慾のあらう筈がない、餘程早くからきざして居たと思ふ、御本人の努力と、御一同のお骨折で少々宛でも攝取出來たのです、多分一月來の賜も之と同一のものと思はれる。此様子では到底衰弱の爲め身體が保てますまい、實に取返しの付かぬ事になつて居る」と申され、之れには先生も全く涙を流され残念がられました。此宣告的なお言葉に祖母、兩親、姉夫婦も悲歎の涙に暮れました、稍暫くして先生を見送り、後に残りし一同何の聲なく、互に涙あるのみ、其時漸く。父が「先生は斯

く仰せられても人の命は只支配し給ふ神の御旨にある事なれば、最後まで戦ひ、手の盡せるだけ盡すに限る」と勵まして呉れました。

臨終四日前

朝珍らしくも豆腐の味噌汁と、御飯を要求して食べましたので家族一同非常な元氣を得ました。本人は兎に角食べさへすれば精力を得るものと考へ、果實汁や、アイスクリーム等を攝取せんと務めました。思ふ十分の一も進みませんでした。

其夜より少しく呼吸困難になり、或は急に終りの近づくのではないかと案ぜられ、一家近親の者憂愁の裡に夜を徹しました。

三日前

病勢次第に募り、或時は嗜眠状態となつたり、正氣付いたりして、現に
なれば頻りに何か口の内で語る様な状態になりました。代る代る手足を擦りながら、互に涙で顔を上げるものなく、其内にも本人が正氣付けばいろ／＼にまぎらして元氣を興へて居りました。

二日前

段々嗜眠状態が続き、嚙言が明了に聞き取れる様な、何となく危険な状態に進みましたが、近親者はまさか最後が明日に迫り居るとは思はれず、

一念看護に夢中でありました。

嚙言には「お祖母さま、あの植木鉢を御覧なさい、優曇華の花がお花見のやうに咲きましたわ、綺麗でせう」と言つては眠りに落ち又父の聲がすると「お父さん、優曇華の花が咲いたわ、あれに雨がかければ一層綺麗なのにね」と云ひ、叔母が代りに来れば、「叔母さん、汽車に乗つて来たの。〇〇は好いわね、〇川の水が何とも云へぬ綺麗ね」暫くして「今日は何だか悲しいわ」と云つて目に涙を浮べて居ります。母が涙を拭ひながら、「K子さん、そんな悲しいなど考へないで、去年〇〇へ遊びに行つた面白い事を考へて頂戴」と申しますと「でもね、花が散るのですもの、悲しいわ」と言うて目に涙を浮べて居ります。

叔母も母も止めどもなき涙でありました。正氣付いて目を開き、「私、今何か言うて、つひ眠るといろ／＼な夢を見てね」其時随分注意はして居たが、母の顔を見て、「あら、母さん、何を泣いてるの、泣くのはよしてよ、私が止度もなく泣けるから」と其時本人は正氣で氣を強く持つて居たのか涙を浮べては居りませんでした。

夜は次の室で皆眠らず、二人宛交代して手足を擦りました。夜八時頃先生が来られ、

注射をして歸られました。それから非常に氣持が好く身體も楽になつたと申して、「母さん、今夜はいくらでもお話しが出来るわ、一晩中話させよう」と言つて、恰度健康當時の様な性質を現はして次から次へと笑はせました。

「明日は萬愚節よ、^{エンリル・フル}K子キトク、と電報を打つて御覽なさい、皆驚いて来るわ」等母と對話を續けて居りました。其内看護婦が交代の爲め入つて來たのを見て、突然其肩を指し、「大きな毛蟲が居るわ」驚いて二人が見ると「あら二人共ボンヤリね。今日は四月一日よ、第一番にやつたのよ」二人で笑ひながら時計を見ると、午前一時四十分でした。其れから午前七時頃女中が入つて來たのを見て「ねーやさん、ゆふべ泥棒が入つて私のお財布も、看護婦さんのも皆持つて行つたのよ」女中が驚いて騒ぎかけますと、自分でカラ／＼笑ひ、「これで第二回歎したわ」

最後の日

間もなく午前九時頃博士が來られ注射をされました。意識もはつきりとして頂きました。十時頃歸られたので父と祖母が玄關にお送りした時、先生は、今朝は脈が少し亂れて居るから、午後一時に來ます、と言はれました。兩人の憂はしい顔に周圍

の者は何とも云へぬが氣が漂ひました。十時半頃、急に「苦しいから先生に昨夜の様な氣持の好い注射をして頂くやうに、母さん早やく」と申しますので、電話をかけたに降り様としたらまた、「母さん、電話では遅い、自動車で」と申しますので其手配に急ぎ戻つて見れば、一同が只ならぬ氣配で枕元に集つて「もう待てないわ」との聲を聞くに至り、豫てより萬一を覺悟はして居たものゝ、茲に望の綱も切れ、愈々臨終の悲しみに直面する近親者一同の悲歎、到底筆紙に現はす事が出来ませぬ。時は午前十時五十分頃でありました。

臨 終

「神さま、神さま、どうぞもう一度私に健康を與へて下さい。」と微かな聲にてお祈りをしたのが恰も臨終の二十分程前でありました。

其れまでは兩親や祖母等、周圍の手厚い看護に何の餘念もなく終始一貫病と戦ひ、一心恢復を豫期して居た其の光景の慘らしさは、今も尙まさ／＼と目に浮べれます。

お祈りした其の言葉の終るか終らぬ内に再び苦しみが來たらしく、苦しみの裡に

「皆さんいろ／＼お世話になりました」「お父さん信仰は最後のものです」

この言葉に周囲の者一同ハット始めて其の臨終の近いことに氣附きました。K子確りなさい、今すぐお醫者様が來ますよ、と申しますと

「もう待てないわ、待てないわ、讚美歌を歌つて貰ひたいけれど、もういゝわ」

歌つて上げる、何番を？ と周囲のものが狼狽して居ると「ややにうつり來し」と自分で申しましたので、兩親や姉が啜り泣き乍ら

ややにうつり來し、ゆふ日かげの、のこるわがいのち、

いまか消ゆらん、みつかひよつばさをのべ………

と歌ふうち「もういゝわ」

其の時父が、K子ちゃん、お父さんがお祈りするよ、と申しますと

「私が祈る」と云ひ暫らくして靜かに落附いて割合力強く

「恵み深きお父さま、私は人間の弱さにいろ／＼な罪を犯しました、どうぞお許し下さい、今からお側に行く事をも許して下さい。」(以下なほ言葉が暫く續きましたが何分

悲しみに打たれて居た一同の事とて遺憾ながら誰れも記憶がありません。)

とお祈りしました。其れから一寸とぎれたので父がアーメンと唱へ、直ぐ母がアーメン

と申しましたら其れに續いて「アーメン」

と言ひ刻々臨終の迫る故でしようか幾分せわしく

「兄ちゃん(帝大在學中の實兄) 兄ちゃんには不忠實な妹でした」

そして側に居る母に

「母さん、もつと確かり手を握つて頂戴」

「生きられるだけは生き度いと思ひましたが」

一寸とぎれて

『○○先生によろしく』

と申しました、傍らに居た看護婦が、お嬢様私の聲がお判りになりますか、と申しますと

「看護婦さん、永い間我儘ばかり申しました、いろ／＼ありがたう」

と看護婦にお禮を云ひ、續いて傍らで泣いて居る女中の嗚咽を聞いたのか

「ネーヤさん、永い間御世話になりました、からだを大事にしてね」と別れの言葉を告げ、尙ほ「Hさん、Hさん」(十年來勤続の番頭)

と云ひましたが、一二分同人の駆けつけるのがおくれて遂に聞かれませんでした。尙ほ祖母、叔母、姉等にも何か言はうとした様子でしたが、迫る臨終に聲も微かとなり、だん／＼吐切れて行きました。この時一同の泣き聲が耳に入つたのか

「みんな泣いてるの、泣いちやいや、泣くと私が心配だから、私は決して寂しくないわ」

と言ひました。

「お父さん神様のお顔がよく見えます」と申しました。父が、K子、あなたは幸福だよ、お父さんは此の年になつて未だ神様のお顔を見る事が出来ない、ほんとうに幸福だよ、と申しますと、其の時まで見た事のない莞爾かな顔をして、再び

「はつきり見えるわ」と申しました、苦しいかね、と、父が申しますと

「ダン／＼苦しいわ、でもキリストの十字架を思へば何んでもないわ」

「皆さんのお祈りに酬ゆる事が出来ませんでした、どうぞよろしく」

少く間を置いて、また「十字架を思へば何んでもないわ」

と再び申しました言葉の語尾は聞きとれぬ位でした。

嗚呼、終に神は快復を許し給はず、其の言葉があつてから間もなく眠るが如くいと

静かに昇天したのであります。

永い間の病床に一度として自分は此儘になる等とは全く豫期しなかつたでせう。眞に神のお召しを自覺したのは、臨終二十分位前らしく、最早や其時は何の執着もない朗らかな心境が窺はれました。茲にK子の地上に於ける永別は盡きぬながら、人生の最大目的に達し得た如く見ゆる事は、残る一族、近親者への唯一の慰めとなりました。

病床の記録によると、K子さんのご病氣は、所謂ふとした風邪がもとであると、自分も人も考へて居つたやうである。然し深く考へて見ると、そこには言ふに言はれない心の悶のある事が窺はれるのである。普通なら人生で最も楽しかる可き結婚を前に控へ、少し位の病氣は直る筈であるのが、これと言ふ事もなく發熱し、それがだん／＼重つて、結婚を不能ならしめたのは、そこに深い理由がなくてはならない。私から見ればK子さんの病氣は工學士との結婚に對する、無意識的抗議であつたと思はれる。然して結婚に對する抗議は、心に秘めたる他の戀人のある事を豫想するに難くな

い。ではK子さんの愛を奪つたその痛み、その戀の相手は誰であるかと言へば、Hと言ふ番頭さんであり、彼に捧げたK子さんの純情から出た戀である。臨終の最後の際に、Hさん、Hさんと二度まで彼れの名を呼んだと言ふことは決して偶然ではないやうに思はれる。獨り育ちのK子さんにとつて、異性のたゞ一人の友はHであつた、そこに乙女の戀心が芽ぐむのも自然である。然し養女であり獨り育ちで萬事控目であつたK子さんには、番頭に對する戀を打ち明ける事が出来ないばかりか、自分自身もその戀心を壓迫し、意識的にはこれを否定して居つたかも知れない。けれども心の奥底にある痛みはどうする事も出来ない、悶々の情が發して遂に病となり、その生命をも奪ひ、此の地上において結ぶ事の出来ない契りを、天國において遂げんとしたのであらう。かゝる意味においてK子さんの死は、手段こそ異つて居るが、かの「天國において結ぶ戀」で有名な、坂田山の心中事件と、その心理状態においては、一脈相通するところがあるのである。あの場合K子さんの病氣は、醫師や藥で治すことは出来なかつたのである。では、どうすればよかつたかと言ふと、某工學士との婚約を破棄する事であつたのである。然しどんなに賢明なお母さんでも、そこまでは思ひが至らなかつたのである、それがためにあたら掌中の珠は奪はれて仕舞つた。然もW氏一家の悲劇はこれのみに止まらなかつた。K子さんなき後の兩親のご悲歎は、人目に見るに忍びないほどであ

つた。その結果お母さんはK子さんの昇天後約六ヶ月ほど經つた時に、病魔に襲はれ、病名は腎臟病であつたと言ふ事であるが、丁度K子さんの死後一ケ年目に、その後を追つて他界されたのである。私はK子さんの葬式の時には自から司式し、お母さんの葬儀にも參會した。父なる人も殆んど夫人と前後して病を得、胸の病を養ふために湘南の某地に轉地され、夫人の永眠を知らせる事も出来なかつたほどである。K子さんが去つてからもう今年で滿四年の年月が過ぎた。その間W氏は愛嬢を失ひ、引き續いて夫人を失ひ、巨萬の資産をも失ひ、敗殘の身を今もなほ湘南の地に養つて居られるとの事である。誠に同情に堪へない。

櫻内本子嬢の自殺

次に私は昨年二月、父母の争ひの犠牲となつて、自殺された櫻内辰郎氏の長女本子さんの事について考へて見る。

櫻内本子嬢の自殺は、新聞紙上にも屢々報道され、社會の各方面に可なり多くの衝動を與へた。あゝした事件の真相を掴む事は容易ではない、よしまたその真相を掴み得たとしても、これを解釋し、これを批判することは一層至難の事である。従つて自分はこの事件を批評すると言ふ氣持でなく、寧ろ家庭教育殊に精神衛生の立場から見、何もかを學びたいと冀ふものである。

櫻内さんの家庭に起つたやうな事柄は、決して珍しいことではない。程度の差こそあれ、あれに

似通つたやうなことは、世間にあり勝ちな事である。誰か果して彼等を責め、彼等を石にて打つ資格があるだらうか。それよりも私共はお互に父として、母として、また家庭教育の擔當者として、自から反省し、あの事件を通じて教訓を受けたいものである。かくする事によつて、本子さんの死の意義を多少でも、増し加へんとするのが私の願ひである。

本子さんの自殺の原因を一言で盡せば、家庭教育の缺陷であると云ふことが出来ると思ふ。然しお父さんが悪かつたとか、お母さんに責仕があつたとか云ふやうな問題は暫らく擱いて、兎も角もお父さんが家庭に不在勝ちであつたことが、その主因であつたと思はれる。家庭は申すまでもなく父と母とがあつて始めて成立するものであつて、家庭教育には父と母とが絶対必要條件である。従來家庭教育と云へば直ぐに母を聯想し、母さへ居れば家庭教育は出来るものやうに考へ、父の立場を忘却したかの如くに見えたが、これは確かに片手落ちであつた。

親と子の間の愛情は最も純なものであり、また最も尊いものであるが、一口に親子愛と云つても決して單純なものではない。前にも述べた通り、無意識的であるにもせよ、自然に性を選ぶものである。五六歳までの子供は男の子の子女の區別なく、自分に最も接近して居る母を愛するのが普通であるが、學齡後になると徐々に男の子は母を、女の子は父をより多く慕ふやうになるのである。

更に進んで少年少女期になると兩親愛より兄弟愛となる。この場合においても多くの場合女の兄弟は男の兄弟と、男の兄弟は女の兄弟と親しむものである。最後に青年期の男女はその愛を兄弟より、兄弟や兩親に似た容貌また性格をもつ異性にと向けて行くのが順序である。

親子愛の性的選擇は兩親の方から見ても矢張り略々同様であつて、母親は男の子により多くの關心をもち、父親は女の子により多く心を惹かれるのである。従つて性格の根本となる愛情の圓滿なる發達を遂げるためには、母親が必要な事は當然であるが、同時に父親の存在も母に劣らず必要條件となつてくるのである。この外家庭には男の兄弟もあり、女の兄弟もなければならぬのであつて、その何れを缺いても感情の圓滿な發達は期せられないのである。殊に子女は父親を通じて家庭に居りながら實社會に接觸し、將來社會に處するに必要な底力と準備とを與へられるものである。従つて母親のみの家庭に育つ子供や、また父が居つても接觸する機會の少ない場合、子女の性格上に種々な影響が及ぶものである。一般にかゝる家庭の子女は男女に拘はらず、空想的となり、著しく自信を缺き、屢々厭世家となり、勇氣の乏しい、臆病な子供となるものである。斯かる子供はよく云へば温厚な子供と言ふ事が出来るが、他面から見れば氣力の缺けた意志薄弱な子供と言つて差支はない。

斯かる見地から本子さんの場合を見ると思ひ當る事が多々あるやうである。色々の人の話を綜合して見ると本子さんの性格は非常に遠慮勝ちであつて、少しも意志の強さがなかつたやうである。或る人々が言つたやうに本子さんにこの強さが少しでもあつたなら、お母さんの悪い處は意見もし、お父さんの改む可き點は改めて頂くやうに忠言も出來たであらうが、本子さんにはそんな氣力は持ち合せて居らなかつた。本子さんはそれ所か、遺書も書かずに淋しく死んで行つたのである。然し考へて見ればこの意志の弱さも本子さん一人の罪ではなく、家庭教育の缺陷に歸する事が出来るのである。

家庭教育は兩親が揃つて居ると云ふ事だけではまだ充分でない。更に夫婦間の和が必要であり、愛が大切である。言葉を換へて云へば父と母との間には完全な統一連絡がなければならぬ。譬へて見れば母が根なら父親は幹であり、子女は父母と云ふ根幹に咲く花であり實であつてその間一絲亂れざる統制がなければならぬ。兩親の間に萬一少しでも間隙があれば子供達は敏感にこれを見破し、彼等の精神は統一を缺き分裂を來たしその程度によつて或は悲しみ、或は怨むものである。

客觀的にはどんなつまらない兩親でも、幼兒にとつてはこの世に母ほどなつかしい人はなく、父ほど偉大な人はないのである。彼等にとつて實に兩親は神様であり、偶像である。かく幼なき人々

の崇拜的である父母が争ふのであるから、彼等が途方にくれ、當惑するのも無理ならぬことである。

また不和な兩親の間に育つ子女は、結婚を嫌ふ傾きがある。年頃の男女が結婚を厭ふと云ふ事は不自然なことであつて、彼等には人生の希望がない。その結果同性愛に陥るか、または自暴自棄になるか二つに一つである。また兩親の一方が結婚生活に不満を感じた場合、その缺陷を満たすために特に子女を偏愛するやうになる。一般に夫の愛に不満を感じる妻は男の子を愛し、妻にあきたらない父は女の子を偏愛するのが通弊である。然るにこの傾向が甚だしくなると母は娘を嫉妬し、息子は父を怨む様になり、際限もない悶着の種となるものである。所詮子供の教養は結婚愛から始められなければならない。

新聞や雑誌の報道によれば、本子さんはお父さんの愛娘であり、眼の中に入れても痛くないほどの可愛がり方であつたやうである。これは櫻内さんの場合さもあつたであらうとなづかれるのである。明枝夫人との間の性格上の相違が夫婦間の間隙の原因となり、その夫婦愛の缺陷を満たすため、父としても、娘としても、母としても各々當然進むべき道を辿つたのであつた。神聖なる意味において本子さんの本當の愛人はお父さんその人であり、お父さんの愛人は誰れあらう本子さんで

ある。辰郎氏が船中で本子さんの自殺の通知を受けとつたときに「愛する本子を死に到らしめたのは私の責任だ」と云つて、傍の見る目も氣の毒な位悲しんだと云ふ事である。櫻内さんは本子さんの死によつて、愛娘と愛人とを同時に失つたのであるから、その悲歎もまた一通りではなかつた事と想像する事が出来る。

また新聞の報道によると、本子さんはMと云ふ青年に關して母との間に、三角關係があつたとか、またお母さんがM青年との進まぬ婚約を迫つたため死んだのだとも傳へられた。私は事の真相を知らない、然かし本子さんの境遇から推察すれば到底三角關係などと云ふ事は考へられない。前段にも述べたやうに本子さんの眞の愛人はお父さんであつた筈である。強ひて三角關係があつたと云へば、それはM青年との間ではなく、お父さんとお母さんと自分との、精神的愛の三角關係であつて、本子さんはそのために可なり悩んだ事だと思はれる。然し明枝夫人がM青年との婚約を勧めたと云ふことが事實だとすれば、結婚を嫌つて居つた筈の本子さんの悩みが、これによつて一層加はつた事であつたと思はれる。本子さんの死の近因は或はその問題に深い關係があつたかも知れない。愛するお父さまとは遠く離れ、愛のないM青年との結婚を強ひられ、お母さんには冷遇され、嫉妬された結果、たゞでさへ氣の弱かつた本子さんは、獨り淋しく死んで行つたのであらう。かく

して櫻内本子嬢の靈はこの世の不完全な父を離れて、完全なる愛の父を求めて天に歸つて行つたのである。

本子さんの自殺に接したとき、世人の注意はたゞその自殺の外形的近因にのみ注がれてゐた。然し本子さんにしても、K子さんにしても、死ぬまでには長い／＼家庭教育の缺陷のあつた事を考へなくてはならない。何事でもさうであるが、決して成る日に成るのではなく、その背後にそれ相當な歴史があるのである。よくかゝる事實を見て「あの人には死に神がついて居るのだ」と言ふが、或る意味において、若くして死ぬと言ふ事は宿命的にも考へられるほど、徐々にかゝる情勢が發展して行くのである。若し宿命的だと言へば、かゝる家庭に育ちかゝる教育を受けたのが宿命なのである。家庭教育の缺陷から、精神不衛生に陥り、若しその事で死ななくとも、何か外の事件が起るとき、それに耐へ得る丈けの意志の力がなく、遂に死を選ぶやうになるのである。

以上はたゞ單に一二の例に過ぎないのであるが、教育の缺陷から如何に多くの青年が、性格的に思想的に、變則な成長を遂げ、或は病死し、或は自から死を擇ぶのを見るとき、吾人は世の多くの父母と愛ひを同じくすると同時に、家庭教育の改善と精神衛生の普及の急務なるを思ふ事切なるものがある。



不許
複製

昭和九年五月三十日印刷
昭和九年六月四日發行

最新家庭教育

定價全圖八拾錢

著者

今村正一

發行所

東京市神田區神保町二丁目一番地
株式會社 三省堂
代表者 龜井寅雄

印刷所

東京市蒲田區出雲町一〇二番地
株式會社 三省堂蒲田工場

發行所

東京市神田區神保町二丁目一番地
振替東京三一五五五番
大阪府西區阿波座下通二ノ六
振替大阪八一三〇〇番

株式會社 三省堂
株式會社 三省堂大阪支店

文學博士 金澤庄三郎編

◇各學校御指定辭書◇

廣 辭

林 新訂版

四六判・二〇〇〇頁
總クローズ装・函入

特價三圓九十錢(送料廿二錢)
(定價四圓八十錢)

日本語の總決算

學者・學生・執務家の机上に必備の大寶典

長い間類書の及びもつかない信用を博して居た舊版を基にし、全然稿を改めて完成した辛苦の結晶が新訂版である。新語を増し、譯語を改め、而かも内容を四六判三段組として見よく引よ、いものとしてある。語源の絶對正確と印刷の鮮明とは本書發刊以來既に定評のあるところで、今更喋々の要もあるまい。これさへあれば手紙を書くにも、論文を作るにも、日常の用に不自由を感じることはない。「一家に一冊」を標語として是非お薦めしたい次第である。

三 省 堂 發 行

271
147

9年7月11日

14/

海王	國	山	山	山	山	山	山	山	山

閱覽濟

